

冒険家マルコ・ポーロが「黄金の国」と紹介した日本には、佐渡をはじめ有名な金山がある。県内にも江戸初期の加賀藩の財政を支えた宝達金山が存在した。古来、人々を引き付けてきた黄金が、珠洲市内でも昭和初期から一時期採掘されていたと聞き、調べてみた。

(珠洲支局・宮腰哲也)

# 珠洲に眠る金の夢

1965(昭和40)年8月25日付朝刊の北國新聞記事が目にしたのがきっかけだった。

「新しい金鉱脈を発見」と見出しが躍る。場所は「大谷町角間」とある。早速、現地向かった。

角間は外浦の珠洲市大谷町から約5kmの道のりを進んだ山間部にある。大谷、長橋、片岩の3町にまたがり、かつて30世帯以上が住んでいたが、今は4世帯のみの小さな集落である。

「金山があったって本当ですか?」。杉田浩さん(76)は片岩町に尋ねると「すくそ」。案内しようか」とのこと。車で付いていった。来た道を引き返し、少し広くなった場所で杉田さんは車を止めた。

「この辺り」と杉田さんが道路を指す。道の下に金を掘った坑道の入り口があったという。道路拡幅工事によって現在は跡形もない。

ピカピカ光る石

「掘っていたのはノザキさんといったかね」。この辺りは杉田さんが、小学校へ毎日通った道で良く覚えているという。さらに、集落に住む中町勇さん(77)、陽子さん(72)夫婦に聞くところ、「うちのおじいさんが手伝

## 昭和初期に採掘、今は跡形なく

いをしていた」と有力情報を持っていた。中町さん夫婦によると、父の松栄さんは金採掘に携わった時期があり、「珍しい菓子をもらった」と話していたという。

中町さんが覚えていた金山の場所は杉田さんと同じだった。「坑道近くに掘って立て小屋があり、ピカピカ光る物が混じった石が箱の中いっぱいあった」。それが金だったかどうかは分からないが、時々、どこかへ金を持って行った様子だった。

中町さんは、坑道に入った経験がある小学生の頃を思い出



新たな金鉱脈かを調査する関係者  
1965(昭和40)年8月、珠洲市大谷町角間

金山があった付近を示す  
中町さん 珠洲市長橋町

す。「学校の先生にも『今に角間まで運河が通って船が上がってくるわい』と言われた」。山村がゴールドラッシュに沸くのではないかと、多くの人が話題にしたそう。

65年の記事を詳しく読むと、昭和の初めから約20年間、金沢市の能崎敬次郎さんという男性が金を採掘していた。その後、能崎さんが死去し、一時閉山していたが、65年に福井の業者が大量の金を含む鉱脈を掘り当て、事業化に乗り出したとある。だが、いつの間にか採掘はさ



## 塚脇金大教授「能登はジオパーク」

今も、金鉱脈は珠洲の地下に眠っているのか。地質学が専門の塚脇真二金大教授(61)に聞いた。

人と大地の営み

塚脇教授は、奥能登をほぼ一周し、丹念に地質を調べてきた。角間集落付近は1500万〜1600万年前に形作られた凝灰岩、泥岩が分布する。凝灰岩の層に金鉱脈が存在する例があるという。

「地質学的にみて、日本海に大きく突き出た地形の能登半島は重要だ。まさにジオパークにふさわしい」。塚脇教授はそう指摘する。珠洲にはかつて石膏鉱山があり、珪藻土は今も採掘されている。人の営みと能登の大地とは長い付き合いがある。塚脇教授はこの春から再び、能登北部の地層調査を続ける。複雑で多層的な大地はまだまた未解明なことが多く、定年までに今後の研究につながる土台を築き、次代に託したいという。

ゴールドラッシュの夢が再び膨らむことはないだろうが、奥能登の最果ての地の地下深くには、まだ見ぬ価値が埋まっている。

